

「イエシュアに仕えた女たち」

ルカの福音書 8:1~3

はじめに

前回のイエシュアの語られた以下のたとえから、少し補足をさせていただきます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:41 「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリ、もう一人は五十デナリ。

7:42 彼らは返すことができなかったので、金貸しは二人とも借金を帳消しにしてやった。

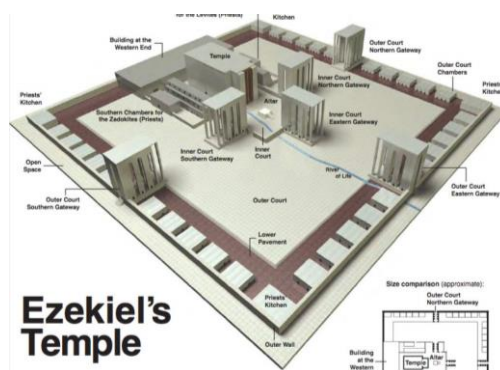
ここでなぜイエシュアは「五百」または「五十」という数を用いられたのかということについて、この二つの数が同時に用いられている箇所がエゼキエルの預言の中にありました。

エゼキエル書【新改訳 2017】

45:1 「あなたがたが相続地としてその地をくじで分けるときは、その地から奉納地として聖なる区域を【主】に献げなければならない…その全域は聖なる地である。

45:2 このうち、縦横五百キュビトの正方形を聖所に充て、五十キュビトの空き地がその周りになるようにする。

45:3 …その中に最も聖なる所、聖所があるようにせよ。



これは主がエゼキエルに見せられた神殿（エルサレム第四神殿）についてのまぼろしの一部です。その「最も聖なる所、聖所」の敷地の大きさを表す数が「五百」と「五十」なのです。ですからこの数の借金を帳消しにされた者、赦された者とは、やがて「神の国」において建てられるエゼキエルが見たこの「最も聖なる所、聖所」に入ることが許される者、そこで働く、仕えるように選ばれた祭司となる者を指し示しているのです。それが前回述べたようにイスラエルの民とそれにつながる私たち教会であるということをごひ覚えてください。「神の国」とは、ひまを持て余す世界ではありません。民の一人ひとりに応じた役目、仕事があり、それはどれも重要で価値のある働きであり、そこは私たち一人ひとりに与えられた賜物、能力が最大に活かされる世界なのです。では今日もこの「神の国」についての奥義を解き明かしてまいりましょう。

1. 十二人

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:1 その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人もお供をした。

以前もお伝えしましたが、「神の国」においてイエシュアに選ばれ、つき従ったこの「十二人」の存在は非常に重要です。なぜならイエシュアはこのように約束しておられるからです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

19:28 そこでイエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めます。

これはどう見てもたとえ話ではありません。何よりイエシュアは十二弟子に対してはたとえではなく奥義を語られます。また私がよく言う「型」でもありません。「人の子がその栄光の座に着く…新しい世界」とはまさに「神の国」を直接的に指し示すものです。ですからこれは全く字義通りに解釈すべき御言葉なのです。つまりイエシュアがそうであったように、今から約 2023 年前にユダヤ、サマリヤ、ガリラヤの地に実際に存在し、そこに生きたペテロ、ヤコブ、ヨハネをはじめとする十二人の弟子たちこそが「神の国」において「十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治め」る者となるのです。

ちなみに、「イエスは…巡って」という箇所に使われているヘブル語はアーヴァル(אָוּוּר)と言い、これはイスラエル人の別名、「ヘブル人」を意味するイヴリー(עִבְרִי)の語源となる言葉なのです。このように「イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられ…十二人もお供をした」というこの記述は、単なる状況説明などではなく、神のご計画における十二部族からなるイスラエルの存在とその重要性を示したものであり、まさに「神の国を説く」御言葉であることを知ってください。

2. 癒された女たち

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:2 また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、
8:3 ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。

以前、十二弟子のそれぞれの名前に秘められた意味、神のご計画について述べましたが、ここではその十二弟子とともにイエシュアにつき従った女性たちの名がいくつか記されています。当時の男性優位の社会にありながらも、イエシュアは多くの女性たちと関わり、彼女たちを用いられました。前回の「罪深い女」もまさにそうでした。筆者ルカはその事実を忠実に記しています。今日の箇所もまた女性たちの存在に光が当てられています。ここでは一人ではなく「多くの女たち」の存在が記されています。そしてまず初めに彼女たちの共通点が示されています。十二弟子がみなイエシュアに呼び出され、選び出された存在であるのに対し、この女性たちはみなイエシュアによって「悪霊や病気を治してもらった女たち」であったとあります。ここで「治してもらった」という箇所に使われているラーファー(לָרַפָּא)「癒やす」という意味の言葉は本来、以下の出来事で用いられた言葉でした。

創世記【新改訳 2017】

20:17 そこで、アブラハムは神に祈った。神は、アビメレクとその妻、また女奴隷たちを癒やされたので、彼らは再び子を産むようになった。

20:18 【主】が、アブラハムの妻サラのことで、アビメレクの家すべての胎を堅く閉じておられたのである。

このようにラーファー「癒やされた」とは本来、アブラハム、すなわちイスラエルの父祖の祈りによって女性たちが「再び子を産むように」なることを意味する言葉なのです。つまりそれは子孫繁栄、「生めよ、増えよ、地に満ちよ（創世記 1:28）」と言われた神の祝福を指し示す言葉だということです。それがアブラハム、すなわちイスラエルの子孫の祈りによって、彼らを通して現わされていくという、「神の国」における祝福の仕組み、すなわちイスラエルによってすべての部族、民族が祝福を受けるようになるという神の約束が、イエシュアにつき従った彼女たちの存在には表されているのです。

3. 女たちの名

そしてここでは「七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア」、「ヘロデの執事クレーザの妻ヨハンナ」そして「スザンナ」というように女性たちの実名が記され、さらに一部その素性までもが記されています。なぜ彼女たちだったのでしょうか。それぞれの名に秘められたメッセージを見てまいりましょう。

① マグダラのマリア

「マグダラ」とはガリラヤ湖の西岸にあった町と言われていますが、今はなく、詳細は不明です。しかしこの名はミグダール(מִגְדָּאֵל)「塔、やぐら」という意味の言葉です。この最初の言及を見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

11:4 彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」

これは有名なバベルの「塔」を指し示すものです。ここに聖書で最初のマグダラ、ミグダールがあります。地上で最初の勇士ニムロデ（創世記 10:9～10）は全世界を統一し、バベルすなわちバビロンの民によって自分の「名をあげよう」とミグダール「塔」を建てようとしてしました。これは自らを神とする、神に敵対する、まさに悪魔、悪霊の業です。やがて終わりの時代にはこのニムロデがよみがえり、黙示録の獣、反キリストとして再びバビロンを再興し、全世界を支配する日が来ます。そして彼はかつてのエジプトのファラオのようにイスラエルを虐げ、その子どもたちを殺し、ユダヤ人を民族的に滅ぼそうとします（出エジプト 1:22）。そのような事実がこの「マグダラ」という名には示されているのです。

しかしそのような支配、イスラエルに敵対する、すなわち神に敵対する勢力を打ち滅ぼし、イスラエルを救い出し、これに勝利をもたらす神のご計画が、彼女の真の名である「マリア」には表されているのです。この名は旧約聖書では本来、以下のように訳され、記され、用いられています。

出エジプト記【新改訳 2017】

15:19 ファラオの馬が戦車や騎兵とともに海の中に入ったとき、【主】は海の水を彼らの上に戻された。しかし、イスラエルの子らは海の中真ん中で乾いた地面を歩いて行った。

15:20 そのとき、アロンの姉、女預言者ミリアムがタンバリンを手にとると、女たちもみなタンバリンを持ち、踊りながら彼女について出て来た。

15:21 ミリアムは人々に応えて歌った。「【主】に向かって歌え。主はご威光を極みまで現され、馬と乗り手を海の中に投げ込まれた。」

これはイスラエルの神、主が預言者モーセを用いてイスラエルの民をエジプトの奴隷支配から救い出し、さらにエジプトの軍勢を打ち滅ぼされた場面です。「そのとき…ミリアム」すなわち「マリア」という名が初めて登場するのです。つまり彼女の名には「イスラエルに敵対する者は神がこれを滅ぼされる」というメッセージが秘められているのです。そしてその究極的な現れが終わりの日、反キリストとその国バビロンに対して行われます。それはまさに「七つの悪霊を追い出し」とあるような、悪霊の完全排除、悪魔に対するイスラエルの神の完全勝利の日です。そのような神のご計画を示した名、それが「マグダラの女と呼ばれるマリア」なのです。

② ヨハンナ

マリアとミリアムのような、旧約聖書に全くの同名の人物はいませんが、「ヨハンナ」この名の中に預言者サムエルの母ハンナの名を見つけることができます。

I サムエル【新改訳 2017】

1:2 エルカナには二人の妻がいた。一人の名はハンナといい、もう一人の名はペニンナといった。ペニンナには子がいたが、ハンナには子がいなかった。

1:6 また、彼女に敵対するペニンナは、【主】がハンナの胎を閉じておられたことで、彼女をひどく苛立たせ、その怒りをかき立てた。

1:10 ハンナの心は痛んでいた。彼女は激しく泣いて、【主】に祈った。

このように「ハンナ」もまた子ども、子孫に関する悩みを抱え、虐げられ、苦しめられていた存在でした。ですからこの「ヨハンナ」という名もまた先ほどのマリアと同様の意味が秘められていると言えます。そして彼女は「ヘロデの執事クーザの妻」であったともあります。ヘロデはエドム人で、クーザはギリシャ語名です。どのような理由で結婚したのかはわかりませんが、「ヨハンナ」は異邦人の支配の下、異邦人の妻となったユダヤ人、イスラエルの民だったのです。さらに彼女は病の中にありました。これは奴隷の民、捕囚の民となったかつてのイスラエルを連想させるものです。しかし彼女は今イエシュアによって癒され、つき従って行く者となりました。彼女は霊的な意味では異邦の神々の妻からイスラエルの神の妻となったのです。やがてこのような事実が、地上に再臨されるイエシュアとイスラエルの民との間には起こるのです。ちなみにヘロデ(סורודו)という名をヘブル語で表記するとそこに「降りる、下る」という意味のヤーラド(רד)という言葉を見つけることができ、天から再びヤーラド「降ってこられる」イエシュアによって異邦人の支配から解放され、イエシュアにつき従う民とされるイスラエルの民の姿が、そのような神のご計画がこの「ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ」という存在には見事に表されているのです。

③ スザンナ(הַצַּנָּנָה)

彼女の名だけは何の説明もありませんが、「ゆり」という意味のショーシャーン(שׁוֹשָׁן)を由来としています。これを用いてイエシュアはこのように語っておられます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:27 草花がどのようにして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたに言います。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装ってはいませんでした。

ここでは「草花」と訳されているのがショーシャーンです。イエシュアはこれを「栄華を極めたソロモン」にも勝ると言っておられます。かつてのイスラエルの最盛期を治めた王ソロモン、彼は神から特別に「知恵と判断の心」を賜り「あなたより前に、あなたのような者はなく、あなたの後に、あなたのような者は起こらない（I 列王記 3:12）」と言わしめた、神からの知恵と富と誉れに満たされた人物です。

I 列王記【新改訳 2017】

4:29 神は、ソロモンに非常に豊かな知恵と英知と、海辺の砂浜のように広い心を与えられた。
4:30 ソロモンの知恵は、東のすべての人々の知恵と、エジプト人のすべての知恵にまさっていた。
4:31 彼は、どの人よりも、すなわち、エズラフ人エタンや、マホルの息子たちのヘマン、カルコル、ダルダよりも知恵があった。そのため、彼の名声は周辺のすべての国々に広まった。
4:32 ソロモンは三千の箴言を語り、彼の歌は千五首もあった。
4:33 彼は、レバノンにある杉の木から、石垣に生えるヒソブに至るまでの草木について語り、獣、鳥、這うもの、そして魚についても語った。
4:34 彼の知恵のうわさを聞いた世界のすべての王たちのもとから、あらゆる国の人々が、ソロモンの知恵を聞くためにやって来た。

10:14 一年間にソロモンのところに入って来た金の重さは、金の目方で六百六十六タラントであった。

このように、ソロモンはその「非常に豊かな知恵と英知」で「あらゆる国の人々」を魅了し、かつ教えたのです。つまり彼はイスラエルだけでなく全世界を支配したのです。そして、そんな彼の富を象徴する数が「六百六十六」という数です。終わりの時代には同じくこの数に象徴される存在である反キリストがこのソロモンに匹敵するような富と権力を手に入れることでしょうか（黙示録 13:18）。しかしそれもまたイエシュアが指し示す「ゆり」ショーシャーンには遠く及ばないとイエシュアは言っておられるのです。そしてその「ゆり」とはもちろん「神の国」におけるイスラエルであり、再臨のメシア、イエシュアを王として再興されるイスラエル王国を指し示しています。「スザンナ」という名にはそのような神の偉大な、壮大なご計画が指し示されているのです。

またイエシュアはこのようにも語られました。

マタイの福音書【新改訳 2017】

16:26 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるでしょうか。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか。

このように、イエシュアは「全世界」の富にも勝るもの、それは「いのち」であると語られました。そのいのちを、すなわち決して朽ちることのない永遠のいのちを、そしてそれを宿した身体によみがえらせてくださることをこの「ゆり」「スザンナ」の存在によって指し示してくださってもいるのです。死からの復活、亡国の再興、滅びからの救い、そして永遠のいのち、これこそがすべての富や力にもまさる神の恵みであり、そのご計画の完成、完了なのです。創世記 1:31 で天地創造の御業を完了された「第六(יְשֻׁבִּי)日」というヘブル語が「ゆり」ショーシャーン(יְשׁוּשָׁן)と結びつく綴りであることもまた重要な事実と言えます。このように解釈するならば、一見何の説明もなく素性もわからない名前だけの「スザンナ」ですが、実に多くの重要なメッセージを持った存在であることがわかります。

4. イスラエル

再臨のイエシュアがお建てになる「神の国」におけるイスラエルの繁栄は、これまで地上に栄えたすべての国々が束になってかかっても遠く及ばないほどのものとなります。なぜならそれは復活のいのち、永遠のいのちに支えられた世界だからです。そして何より人となられた神、主イエシュアが王として治められる国なのです。今のこの世の常識をはるかに超えたその凄まじい財力と能力をもって、この御国の民は王の王、主の主であるイエシュアに、また十二の座に着く弟子たちに仕えることになるのです。それが「彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた」という記述に秘められた「神の国」の「型」なのです。

しかし、私たちは神である主を、御子であるメシア、イエシュアを知る上で、イスラエル、ユダヤ人という民族を軽視、ないがしろにしてしまいがちです。どうか私たちの神が、アブラハム、イサク、イスラエルの神であることを忘れないでください。私たちの主イエシュアはイスラエルのメシアでありユダヤ人の王であることを忘れないでください。また今の霊的に盲目となっているユダヤ人たちの姿に惑わされないうでください。そして、どうか自分と神様という関わりの中だけに捕らわれないでください。神のご計画は「神の国」はあなたと神様の間だけで解決するようなそんなちっぽけなものではありません。栄華を極めた者の、そのはるか上にあるものなのです。その中心となるイスラエルという国について、その民について、その将来について、もっともっと注目していただきたいのです。それが、それこそが神を知り、主イエシュアを知ること、その御言葉に耳を傾け、御声を聞き、神の御心、みむねを知り、それとともに生きることになるのです。それこそが真の私たちの今できる歩み、生き方なのです。どうか御霊によってそのような者として一人ひとりが守られ、保たれますように。